

名古屋市

西部地域療育センターだより

正面壁画「友情」より

No.21

平成21年度西部地域療育センター連続講座（平成21年7月3日）

— 発達に偏りのある幼児への支援 —

所長 鷲見 聡（小児科医）

今日の連続講座の前半は、幼児期の支援の重要な点について、スライドを用いながら話をさせていただきます。後半は、具体的な例を示します。ただし、実在のお子さんではなく、私が創作した3人の幼児です。連続講座の新しい試みとして、参加者の皆さんにはグループに分かれて議論していただき、3人の幼児への対応方法について発表していただく予定です。

はじめに 今日のタイトル
「発達障害」→「発達に偏りのある」

●療育センター受診児の動向
診断基準を満たさない軽度の発達の偏りの児が増加

●発達障害の支援方法は、どの子どもにも役に立つ

→今日の内容＝広汎性発達障害児への支援方法は、
発達に偏りのある幼児すべてに用いることができる

る、あるいは、何らかの心配がある場合には「様子を見ましょう」ではなく、必要なサポートを行うべきだと思います。もちろん、長期的な視点からは診断を確定させることは重要ですが、幼児期には診断名が確定していなくても支援を開始するべきだと思います。

二番目は、発達障害児への支援方法は発達障害児に対してのみ有効とわれていました。しかし、最近、発達障害児に対する支援方法は、一般の子どもたちの支援にも役に立つことがわかってきました（小林秀次、辻井正次：そだちの科学,11, 70-73）。従って、発達障害児への支援方法は、軽い発達の偏りの子どもにも役に立つと思います。

以上のような最近の動向を踏まえ、タイトルを「発達に偏りがある幼児への支援」としました。今日の話の内容は、広汎性発達障害児に関するものですが、発達に軽い偏りがある子ども、あるいは、発達のペースが遅い子どもにも応用できると思います。

支援の基本 支援の基本的考え方

- 子どもの発達の特徴と、その時々状況を正しく理解する
- 養育者との信頼形成や、気持ちの安定に努める
- スモールステップの目標（＝できそうな目標）を設定して成功体験を積み重ねる

はじめに、療育に関する最近の動向に触れたいと思います。

一番目は、療育センターでは、発達障害の診断基準を満たさない、ごく軽度の発達の偏りが認められる幼児の受診が増えてきました。年齢が低いために診断名がつかない場合もありますが、2、3年経過をフォローアップしても発達障害の特徴の一部分しか示さない子どももいます。すなわち、非常に軽い発達の偏りを持つ子どもたちがいるわけです。そのような子どもたちの場合にも、何らかの困難があ

発達障害についての本やパンフレットには、細かい診断分類や支援のテクニックは詳しく書いてあることが多いのですが、非常にたくさんのことが書かれているために、かえって基本的考え方がわかりにくい場合があるようです。そこで、まず、支援の基本的な考え方を短くまとめてみました。

- 子どもの発達の特徴とその時々状況を正しく理解する。
- 養育者との信頼形成や、気持ちの安定に努める。
- スモールステップの目標(=できそうな目標)を設定して、成功体験を積み重ねる。

という考え方が基本です。療育関係者の間で詳細については意見の相違がありますが、基本はスライドの考え方でほぼ一致していると思います。まず、子どもの発達の特徴を正しく理解することが支援の第一歩で、発達の特徴を無視した対応は子どもに大きなストレスを与えますし、健やかな成長を妨げる要因になります。養育者というのは、主に母親を意味しますが、保育園では毎日世話をしている保育士の方々です。信頼のおける養育者がいれば、幼児は安心感を得て、前向きにいろいろなことに取り組むことができるようになります。逆に、信頼できる養育者がいないと精神的に不安定になりやすいです。

支援の基本

なぜ、スモールステップが必要か？

- その子にとって高すぎる目標

うまくいかない、叱られる、イライラする
失敗する、やる気・自信を失う

- できそうな小さな目標＝スモールステップ

うまくいく、ほめられる、気持ちが落ち着く
成功する、やる気・自信を得る



できた！

スモールステップの目標、すなわち、できそうな小さな目標を設定することも大切です。その子にとって、目標が高すぎると、「うまくいかない、叱られる、イライラする、失敗する」という状況に陥り、「やる気と自信」を失いやすくなります。しかし、その子ができそうな小さな目標を立ててあげれば、「うまくいく、ほめられる、気持ちが落ち着く」という状況になり「やる気、自信」を得ることができます。

子どもたちの成長を長い目で見ると、やる気と自信を子ども自身が持ち続けることができれば、たとえ時間がかかってもいろいろなことができるようになります。逆に、高すぎる目標を強要しすぎて失敗体験を重ねると、やる気と自信を失うことになり、成長にとってマイナスです。発達の偏りが大きい子どもに対しては、「やる気と自信」をつけるために、その子なりにできたところに注目し、褒めることが重要だと思います。場面によっては叱ることも必要ですが、周囲の大人が褒める努力をしないと、褒める回数に比べ叱る回数の方が多くなりがちです。

コミュニケーションの発達支援 コミュニケーションのはじまり

- 「気持ちが伝わった喜び」をまず育てる

- 音声以外のメッセージ
- 精神的安定

信頼・愛着



次に、コミュニケーションの発達支援について話します。子どものコミュニケーションの発達段階を正しく理解して、「伝え合うことができた」という体験をその子どもにさせてあげてください。

例えば乳児期、音声としての言葉を喋る前の時期には、笑う、声を出す、見る、指差す、ジェスチャーなどの「音声言語」以外のメッセージも、広い意味での言葉です。この時期には大人の方もジェスチャーを使うのも良いと思います。親から子どもへメッセージを送る、子どもから親へメッセージを送る、そして、気持ちを伝え合った喜びをまず育てることが重要です。言葉での会話にあまり関心がない子どもも、クスグリ遊び、抱っこなど体を使う遊びが好きな場合も多いので、体遊びをしながら関わるのも良いかもしれません。また、養育者の精神状態が安定していて、ニコニコしている場合には、子どもの伝えようとする意欲が増します。逆に精神的に不安定でしかめ面をしている場合、子どもの伝えようとする意欲が減ってしまいます。従って、母親の気持ちが安定するように、育児支援を行うことも大切だと思います。

コミュニケーションの発達支援

弱いメッセージも受け止める

- 伝える、訴えるなどのメッセージを送ることが苦手な場合がある。
- 弱いメッセージでも気づいてあげて、メッセージを返してあげる。
- メッセージのキャッチボール
→ 言葉のキャッチボールへ

発達障害の子どもは、伝える、訴えるメッセージを送ることが苦手な場合が多く、注意深く観察していないとわからない弱いメッセージを出す場合もあります。小さな声を出す、チラッとだけみる、黙って寄ってくる、モゾモゾしている、などです。まわりが気づかないと、せっかく伝えようとした気持ちが生かされないことになるので、弱いメッセージ

でも受け止めてあげて下さい。そして、子どもにメッセージを返してください。コミュニケーションが始まります。

言葉の発達支援
言葉の発達段階にあわせる

- 言葉の発達段階に合わせる
- 短く、はっきりと
- 感動を共有する



次に、言葉の発達を促す「言葉のかけ方」について整理します。稀に、難聴によって言葉遅れになる場合があります、その場合には対応を変えなければなりません、これからの話は、コミュニケーションに興味乏しいタイプの子どものことです。「言葉のかけ方」は、言葉の発達段階に合わせ、しゃべる意欲を引き出すことが大切です。例えば、まだ、音声としての言葉を喋れない子どもが犬を見つけ、嬉しくて「アー、アー」と声を出しながら母親に訴えているとします。この時期には、長いセリフ、例えば「この犬は隣の山田さんのポチだね」と話しかけても理解できません。「ワンワン」「ワンワンだね」と、短いセリフをゆっくり、はっきりと言う方が理解しやすいのです。また、子どもの嬉しい気持ち、すなわち“感動”を共有することが大切です。母親に自分の気持ちが伝わったという体験をすることにより、母親に伝える、話そうとする気持ちが育っていきます。お母さんの中には、音声としての言葉を早く喋って欲しいという気持ちから「ワンワンと言ってごらん」と何度も子どもに要求する場合もあるようですが、小さい子どもにとってはあまり楽しいことではありません。「アー、アー」でも気持ちが伝われば子どもは嬉しくなって、積極的に「アー、アー」と声を出すようになり、次第に「ワンワン」という発音に変わっていきます。

言葉の発達支援
話しかける場面とは
(子育て経験のないお母さんへ)

- 生活の中で、自然体で、話しかける
例:「お茶飲もうね」(顔をみて、にこやかに)
- 世話をしながら、話しかける
例:靴を履かせる時に指差しながら「靴はこうね」
- あいさつ「バイバイ」「おはよう」「ありがとう」
- 掛け声、擬態語
例:ボールころがしながら「コロコロ」
- 子どもの気持ちを想像して、言ってあげる
例:「おいしいね」「帰りたいくないよね」

子どもに話しかける場面とはどのような場面でしょうか？子どもに話しかけることについては、保育士の方々は非常に上手です。しかし、初めて子育てをするお母さんには、どのような場面で話しかけたらよいかイメージが沸かない場合もあります。核家族化、近所付き合いの希薄化など、社会の変化によって、見本となる先輩お母さんがいない場合もあるからです。そのような場合「よく話しかけましょう」という漠然としたアドバイスをするのではなく、より具体的に示してあげる必要があります。例えば、「お茶飲もうね」と生活の中で自然体と話しかける、「靴はこうね」と履くのを手伝いながら話しかける、「バイバイ」「おはよう」「ありがとう」などあいさつの言葉を使う、「コロコロ」などの擬態語を使う、「おいしいね」など子どもの気持ちを想像して言う、などです。子どもの顔を見ながら、にこやかな表情で話しかければ、子どもも嬉しくなると思います。

言葉の発達支援
子どもの理解を容易にする工夫

- 一般に、短いセリフをゆっくり話すと子どもは理解しやすい。
- 理解を進めるために視覚情報も利用する
- 指差し、物を見せる、ジェスチャーを用いる
- 抽象的な言い方を避け、具体的に指示する
抽象的:「ちゃんとしなさい」「おりこうにしなさい」
具体的:「座ってようね」「お話を聞いて」

言葉の理解を容易にする配慮について、整理します。一般に、短いセリフをゆっくり、はっきりと話すと理解しやすいです。また、理解を進めるために視覚情報も利用すると理解が進む場合も多いです。例えば、「指差しを併用する」「物を見せながら話す」「ジェスチャーを用いる」などです。指示の言葉は、抽象的な表現よりも、具体的な表現の方がわかりやすいです。例えば、抽象的な表現とは「ちゃんとしなさい」「おりこうにしなさい」などで、どのような行動をしたら良いかわからない子どももいます。「座ってようね」「お話を聞いて」と具体的に指示した方が幼児にとってはわかりやすいです。

言葉の発達支援
気が散って聞いてくれない場合

- 注意を惹いてから話しかける
肩などたたいて振り向かせてから話す。
肩に手を置きながら話しかける。
物を見せて注意を惹いてから、話しかける。
- 発言の機会を与える
- できそうな目標を設定する
一部でも聞くように促す

気が散って、話を聞いてくれない子どもも少なくありません。注意を惹いてから話しかけると聞いてくれる場合があります。例えば「肩などトントンたたいて振り向かせてから声かける」「肩に手をおいて話しかける」「物を見せて注意を惹いてから、話しかける」などです。黙っていることが苦手な子どもの場合には、発言の機会を多くしてあげると良いかもしれません。また、1対1の場合は集中できても、クラスみんなへの話の時には気が散ってしまいます子どももいます。そのような場合「全体への話の後に1対1で補足する」「その子の前に立って全体へ話をする」「特に重要な内容のところで名前を呼んで注意をひく」「前半だけ聞ければよしとする」などいろいろな工夫が考えられると思います。話を聞くということについても、できそうな目標をたて、少しずつ目標を上げていくと良いと思います。

言葉の発達支援

子どもの話す意欲を高めるには

- 「〇〇と言いなさい」など教えようとする雰囲気は、小さい子は概して嫌い。楽しい雰囲気です！
- 興味を持っていることを話題にする。
- 言語理解のレベルに合わせて、話しかける
- 子どものセリフが、単語の一部、あるいは、発音が不明瞭でもわかってあげる。
- 本人に言い直しをさせずに、正しい言い方で繰り返して言う。

「・・ゴ」(リンゴ) 「リンゴだね」

言葉の発達支援

質問に答えられない場合には

- 言葉での指示をどこまでわかっているか？
自分で話す時に多語文で話せても、質問に対してはうまく答えられなかったり、相手の長いセリフを理解できない。
- 選択肢を示す
- ハイ、いいえの質問形式
- 視覚情報

自分から話す時にはべらべら話すことができて、質問に対してはうまく答えられない子どももいます。まず、大人のセリフをどこまで理解しているか考えてみてください。子どもの言語水準にあわせた質問形式を選ぶ必要があります。わかりやすい質問の形は、「はい」「いいえ」で答える質問、次に容易なのは答えの選択肢を選ばせる質問、一番難しい質問形式は「何?」「どれ?」「なぜ?」といった形です。質問の言い方は、ゆっくり、はっきり言うとう理解しやすいです。また、視覚的情報を併用すると良い場合もあります。「物を見せる」「ジェスチャーを使う」「絵カードを使う」などです。しかし、絵カードが役に立つ子どももいれば、効果がない子どももおりますので、それぞれに合わせて工夫する必要があります。また、非常に緊張しやすいために、言葉で返事をする代わりにジェスチャー、例えば「うなずく」「首を振る」などで返事をする子どももおります。最初は言葉での返事を求めるよりも、少しずつ環境に慣れさせることを優先した方が良いと思います。

言葉、会話の力を伸ばすには、子ども自身の喋りたいという意欲も重要です。しかし、まわりの大人が「〇〇と言いなさい」と教えようとするのが少なくないようです。教えようとする雰囲気は、小さい幼児は概して嫌いです。楽しい雰囲気の中で、会話をする喜びを体験させた方が喋る意欲が高まります。話題を子どもが興味を持っていることにすることも良いかもしれません。また、言葉が出始めた時期には発音が苦手なお子さんも少なくありません。この時期は、単語の一部、あるいは、発音が不明瞭でもわかってあげて、子どもには言い直しをさせずに、正しい言い方で繰り返して言うのが良いと思います。例えば、リンゴを「・・ゴ」と言った時に「リンゴと言いなさい」と言い直しをさせると喋ることに消極的になってしまうかもしれません。「リンゴだね」と大人が言い直してあげれば十分だと思います。ただし、5歳ぐらいになって、基本的な力は十分ついたのでにもかかわらず、発音だけが苦手という場合には、発音のトレーニングを開始した方が良い場合があります。

特徴的な行動

視線が合いにくい場合には



視線が合いにくい子どももいますが、なぜ、視線をあわせないのでしょか？ 発達障害のお子さんの中には情報の処理が苦手なお子さんもあり、視覚情報と聴覚情報、すなわち、言葉と視線の両方の情報が同時にくると情報が過剰になる場合があります。視線を合わせるとかえって混乱するようでしたら、当面は「視線はあわなくても、聞いていればよし」として下さい。また、視線が役に立つことに気がついていない場合もあるようです。視線で訴えると希望

がかなうことに気がつく体験、例えば、視線の先にお菓子があるとそれをもらえることに気がつく体験ができると、視線を合わせやすくなると思います。視線を合わせない子どもに対して、時々「こっち向いてね」と促す程度でしたら良いと思いますが、視線を合わせるという形式だけを厳しく指導すると、苦手なコミュニケーションがもっと苦痛になってしまう恐れがあると言われています。まず、コミュニケーションの楽しさを体験することを優先させましょう。

特徴的な行動 こだわり行動について

- こだわり行動には良い側面もある
 - 1) 好ましいこだわり・・・正しいルール、習慣
 - 2) 好ましくないこだわり・・・不自然な行為
 - 3) 困ったこだわり・・・日常生活に支障
- 一度パターンを覚えると修正しにくい
最初に好ましいパターンを覚えさせる
困ったこだわり→ましなこだわり
- 精神不安定の時に、こだわりは強くなる
こだわり行動によって、気持ちが安定する

ひとつの行動パターンや、特定のものに執着するこだわり行動は、広汎性発達障害の特徴のひとつとされています。ただし、一般の子どもにも軽いこだわり行動が見られる場合があります。このこだわり行動は、必ずしも悪い行動特性ではなく、良い側面もあります。正しいルールや生活習慣に執着するとしたら、プラスの特性と捉えてよいと思います。しかし、発達障害の子どもたちは一度パターンを覚えると修正しにくいので、最初から好ましい行動パターン、習慣を覚えさせることが大切です。もし、困ったこだわり行動パターンに陥ってしまったら、一気にその行動をやめさせようとせずに、よく似た、少しましな行動パターンに置き換えていくと、うまく行くことが多いようです。また、精神不安定の時には、こだわりは強くなると言われています。しかし、こだわり行動が気持ちを安定させている場合もあるので、こだわり行動を止めさせるとさらに精神不安定になる可能性があります。こだわり行動をただちに止めさせることよりも、精神不安定の原因を考え、その原因の解決を試みるのが先だと思います。

特徴的な行動 過敏な面について

- わがままではなく、もともと感覚が過敏
 - 聴覚過敏: 大きな音や特定の音(泣き声、ざわめき)に過敏、耳ふさぎをする。
 - 触覚過敏: 特定の服の肌触りが嫌い。
 - 臭覚過敏: 特定の臭いが嫌い。
- <対応法>
- 無理に我慢させると、ますます過敏になる
 - 苦手な状況を避けて、少しずつ慣らす。
 - 気持ちが安定すると、過敏が軽減する場合も

特定の音、臭い、肌触りに過敏な子どももいます。それを「わがまま」と解釈されるとその子は苦しくなります。もともと感覚が過敏で、一般の人には苦痛ではないレベルでも、本人には非常に苦痛を感じることをまわりの人は理解してあげて下さい。無理に我慢させると、ますます過敏になることが多いので、少しずつ慣らした方がうまくいくようです。また、不安になるとますます過敏になり、逆に気持ちが安定すると、過敏性は軽減する場合があります。

集団生活場面 集団生活場面で行動観察

「子どもの発達の特徴とその時々状況 正しく理解する」

- 行動観察: 他の子どもとの関わり、集中度、ルールのある遊び、ごっこ遊び、情緒の安定度、言葉の理解度、設定課題、……
- 多くの場面で、複数の人による観察
- より詳しく 例: 集中できない→特にどの場面

次は、集団生活場面での支援方法についてです。最初の方に示した基本的な考え方を思い出してください。「発達の特徴と、その時々状況を正しく理解する」が基本ですが、集団生活場面では特にその時々状況を正しく観察する必要があります。他の子どもとの関わり方、保育士との関わり方、どの程度集中できるか、ごっこ遊びやルールのある遊びをすることができるか、気持ちは安定しているか、言葉指示の理解度、言葉での表現力、周囲の環境、などです。より詳しく観察すればする程、対応方法のヒントが見えてくると思います。また、場所によって行動が大きく異なる子どももいます。園の中の様々な場所、自宅、診察や知能テスト場面など、多くの場所、場面での情報を参考にと、その子ども本来の特徴を正しく理解することができると思います。

集団生活場面 問題行動の意味を考える



観察を行って、さらに、その時の子どもの気持ちや、その行動を起こした背景まで理解できると、対応がよりうま

くいく場合があります。例えば、机に座って製作を行っている時「イヤダ、イヤダ」と叫んでいるとします。いろいろな理由が考えられます。「説明が難しくて理解できない」「細かい作業は苦手で作れない」「集中力が続かない」「朝叱られて、ずっとイライラしている」「自分の好きな物を作らせてもらえない」「隣の子が話しかけてくるのが邪魔」「お腹がすいた」「担任に手伝ってもらいたい」その他いろいろな理由が考えられます。その子自身の特徴、周囲の状況、その時の気持ちを正しく理解して、対応、工夫の仕方を変える必要があると思います。

集団生活場面 信頼形成と気持ちの安定



● 子どもと養育者との信頼形成や子どもの気持ちの安定に配慮する

不安が強くなればなるほど、問題行動は増える。
大人がその子を嫌がれば、子どもの気持ちは不安定になりやすい。

集団生活場面でも、子どもの不安を取り除いて「気持ちを落ち着かせる」ことも基本のひとつです。一般に、不安が強くなればなるほど、様々な問題が増えていきます。そして、もし担任がその子を嫌がれば、子どもの気持ちは不安定になり、問題行動がさらに増えやすくなります。担任と子どもとの信頼関係ができて、子どもの気持ちが落ち着けば行動も落ち着くことが多いです。時期としては、初めての時、例えば、入園直後、クラス替え、担任の交代、行事の時などに特に不安になりやすいです。普段以上にいていねいに声かけなどを行って、気持ちを落ち着かせることが必要だと思います。

集団生活場面 達成可能な目標を設定する



● 達成可能な目標を設定して、成功体験を積ませる。一度に全部達成しようとしてもできない。

● 勝手な行動、乱暴な行動を3分類

- 1) 好ましい行動……ほめる、微笑む、ご褒美
- 2) 好ましくない行動…無視、黙認
- 3) 許しがたい行動…毅然とした態度で禁止

● 「ダメ」の連発を避け、「・・・しようね」と誘う

「スモールステップ=できそうな目標を設定する」ということは基本的な考え方です。集団生活における問題行動に対しても、一度に全部をなおそうとすると高すぎる目標に

なってしまいますので、優先順位をつける必要があります。そのために、問題行動を3つに分類して整理する方法があります。一番目は「好ましい行動」、二番目は「好ましくない行動」3番目は「許しがたい行動」です。好ましくない行動すべてに対して注意をすると、ずっと注意ばかりされていることになり、だんだん注意の効果はなくなりますし、一方、子どものイライラはひどくなります。迷惑はかからないが好ましくない行動については、無視したり黙認した方が良い場合があります。許しがたい行動は、毅然とした態度で一貫して禁止する必要があります。初めて発達障害児を受け持った先生の中には、厳しく叱ることを躊躇してしまう方もいるようですが、場面によっては叱ることはもちろん必要です。ただし、「ダメ」の連発では効果が薄れていくので、ダメとばかり言わずに「・・・しようね」と正しい行動を促したり、黙認する場面を作ったりして、対応を工夫する必要があると思います。

集団生活場面 かんしゃくを起こした場合



● かんしゃくが起きてしまったら

- 1) 落ち着いた口調で対応
- 2) 場所を変える（落ち着ける場所へ）
- 3) 危険がない場合、そのまま、放っておく
- 4) 子どもによっては、抱きしめると落ち着く

● 状況を観察

次に、個々の行動について整理します。まず、かんしゃく、パニックについてです。もし、かんしゃくが起きてしまった場合「落ち着いた口調で対応する」「場所を変える」「危険がない場合そのまま放っておく」「子どもによっては抱きしめる」というような対応が効果的と言われています。まず、かんしゃくをしずめる必要があります。かんしゃくが頻回に起きないようにするには、その子どもの特徴やその時の状況を正しく理解する必要があります。では、どのような時に特にかんしゃくを起こしやすいのでしょうか？例えば「切り替える場面」「独り遊びを邪魔された時」「言葉で伝えられない時」「順番を待つ時」など様々な状況が考えられるので、まず、状況を正しく理解する必要があります。

集団生活場面 かんしゃくを起こさないために

- かんしゃくを避けるための配慮
 - 1) 苦手な状況に追い込まない
 - 2) 見通しをよくして、混乱を避ける
 - 3) 安定した精神状態
 - 4) 兆しを捉える
 - 5) 長期的には、気持ちのコントロールができるように

かんしゃく起こさないようにするにも、まず、できそうな目標を設定することが必要です。すなわち、比較的容易な状況で我慢することを当面の目標とした方が上手くいくと思います。例えば、「突然の切り替えが苦手」の場合には、前もって予告する。「長い時間待てない」場合には、「短時間だけ待たせる状況にする」などです。長期的には、どのような状況になっても対応できるようになって欲しいものですが、いきなり高すぎる目標を設定すると、かんしゃくは増えてしまいます。日々かんしゃくを起こしている時は精神的にも不安定になっている場合が多く、悪循環におちいり易いためです。比較的やりやすい状況を作って、気持ちの安定にも努める必要があると思います。

集団生活場面 友達とのトラブルを起こす場合

- 「たたく」など乱暴な行為は、まずとめる
- なぜ、トラブルになるか考えて対応する
 - 1) 伝えられない → 「かして」など言い方を教える
 - 2) ルールがわからない場合 → わかりやすく教える
→ わかりやすいルールに変える
 - 3) 他の子の気持ちがわからない場合
(→ 他の子の気持ちを代弁する)
→ 長期的には、相手の気持ちがわかるようになるように、感情理解を促す体験
 - 4) 叱られてイライラ → 小さなことでも褒める

友達に対して、「たたく」など乱暴な行動をとる場合があります。乱暴な行動に対しては、まず、止める必要があります。そして、なぜ、乱暴な行動をしてしまうのか、考えてください。この場合にも、いろいろな状況が考えられます。「一緒に遊びたいがうまく誘えない」「ルールがわからない」「関わられるのが嫌」「叱られてイライラしている」などです。子どもの特徴やその時の誘因を正しく理解した上で、その子ができる目標を設定することが大切だと思います。例えば、ゲームのルールがわからない時には、「わかりやすい説明をする」、あるいは「ルール自体を簡単にする」などの工夫が考えられます。長期的な視点からは相手の気持ちがわかるようになって欲しいので、感情理解を促す体験を積み重ねると良いと言われています。しかし、子ど

もの発達段階によって対応方法を変えなければなりません。例えば、相手の気持ちを言語化して説明すると感情理解が進むと言われていますが、言葉の理解が未熟な子どもの場合には、長いセリフでいろいろ説明するよりも、「ダメ」という短いセリフと表情で伝えた方が効果的です。やはり、それぞれの子どもの発達段階を正しく理解する必要があります。

集団生活場面 課題をやらない場合

- なぜやらないか考えて、対応する
 - 1) 説明がわからない → わかりやすく説明
 - 2) うまく作れない → うまく作れるように援助
 - 3) やる気がしない → 褒める、ごほうび
→ 選択肢を与える
→ 一部だけをやるように
 - 4) 手がべとべとするのがいや
→ べとつかない配慮
 - 5) 気が散る → 刺激を減らす

課題をやってくれない子どもも少なくないと思います。比較的課題をやってくれる場面、全然やらない場面を比較すると、なぜやる気がしないかわかってくる場合があります。例えば、やる気がしない理由が「課題についての言葉での説明がわからない」時には、わかりやすく説明してあげて下さい。「手先が不器用でうまく作れない」場合には、うまく作れるような援助、例えば、一部分手伝うなどして、本人ができそうな状況を作ってください。また、やる気を出す一般的な方法としては「褒め方を工夫する」「選択肢を示して子どもに選ばせる」「課題の一部分だけやらせる」などがあります。どの対応が効果的かは、その子どもの発達の特徴や状況によって異なります。最初に行った工夫で上手くいかないことも多いと思いますが、次の工夫をして下さい。何とかできる状況で、できたという成功体験を積み重ねることによって、やる気、自信がついていくと思います。

集団生活場面 落ち着きがない場合

- 多動を助長している要因を考えて対応する
 - 1) 刺激が多い → 刺激を減らす
 - 2) 言われていることを理解できない
→ わかりやすい説明
 - 3) 叱られてばかりでイライラしている
→ 叱り方・褒め方の工夫
「ダメ」の連発をやめ、「・・しようね」
- できる目標をたて、一步一步すすめる
例：教室から出ない、最初だけでも座る

落ち着きがない場合にも、まず状況を観察して下さい。誘因がわかれば、対応しやすくなります。製作の時はすわ

ってられるけれど、絵本の読み聞かせの時はフラフラするという場合、言葉の理解が苦手なのかもしれません。その場合には、わかりやすいセリフの絵本を選ぶと良いかもしれません。「叱られてばかりでイライラしている」場合には、叱り方・褒め方の工夫が必要になります。落ち着きのなさを助長している誘因がないかどうか、それを軽減できないか考えてみましょう。そして、その子その子にとって、何とかできる目標をたてて、一步一步進めることが重要です。例えば、教室から飛び出す子どもにとっては、ずっと着席して手足を動かさないことは、高すぎる目標ですので、まず教室にいることを目標として一步一步進めて行く必要があります。他の困った行動への対応と同様に、発達段階に応じた、スモールステップの目標設定が必要です。

補足 スモールステップを忘れやすい状況



- 子どものことを一生懸命思うあまり、あせってしまう時
「〇〇までに追いつかせたい」
「発表会・行事をうまくやらせたい」
園／学校の選択の時
- 失敗体験の繰り返しでは意味がない。小さな成功を積み重ねる。

スモールステップの考え方がわかっていても、実際の場面では難しいことが少なくありません。子どものことを一生懸命に思うあまりに、あせってしまう時に、高すぎる目標を設定しがちです。期限を決める、例えば、クラス替えまでに、入学までに何とかしたいと考えた時、本人にとって高すぎる目標になりやすいと思います。また、発表会などの時に「他の子どもと全く同じようにやらせたい」と考えて高すぎる目標を作ってしまう場合もあるかもしれません。もちろん、努力して、向上することは大切ですが、失敗体験の繰り返しでは意味がありません。小さな成功でよいので、成功体験を積み重ねることが重要だと思います。

補足 精神的なサポートについて



- 育児に不安を持ちやすい
- 親の精神的不安は、子どもも精神的不安定に
→育児支援が重要
- 子どもの成長している所に気がつくように
- 「それぞれの特徴に沿って健やかに成長すれば、それも正常発達のひとつと考えたい」(高橋脩先生)

発達に偏りがある子どもを育てる時には、育児に不安を持ちやすいものですので、ご両親、特に、母親への精神的サポートも重要だと思います。親が精神的に不安になると、子どもも精神的に不安になりやすいからです。親の気持ちに共感しながら話を聞けば、気持ちが落ち着くことが多いと思います。また、子どもの頑張っている所、成長している所に目が行くように、会話を心掛けるのも良いと思います。

しかし、「他の子どもと同じでなければいけない」という気持ちでご両親に強すぎると、ご両親が精神的に追い込まれる場合が多いようです。どの子どもも必ず成長しますが、すべての子どもが定型発達、すなわち、標準的な発達経過を示すわけではありません。困っているところについては変わって欲しいと考えるのは当然ですが、「標準的な発達経過しかダメ」とまで思い込む必要はないと思います。ちょっと標準と違うところがある子どもたちにも、その子その子のすばらしさがあると思います。豊田こども発達センターの高橋先生は「多数派の普通児の発達を唯一の理想とするのは止めた方がよい。多様な正常発達があり、それぞれの特徴に沿って健やかに成長すれば、それも正常発達のひとつと考えたい」と述べておられます。私も、それぞれの特徴に沿って健やかに成長させることを目標とすることが良いと思っています。成長して変えなければならないところもあると思いますが、「違うところもあっていいんだ」という視点も持ちながら、ご両親には子育てを楽しんでいただきたいと思っています。

以上で、幼児期の支援のまとめのスライドは終わりです。ご清聴ありがとうございました。

グループ討論を行った3例 (創作例)

例1

A君 4歳の男児(衝動的な行動)

<クラスの状況>

クラスは20人程で、担任はベテランの女の先生ひとりと、副担任の若い男の先生が一人配置されている。保育室内には机が4つあり、それぞれ5-6つの椅子がある。廊下側には道具箱、玩具箱がならんでいる。窓からは園庭が良く見える。

<園での様子>

到着 朝の会が始まる少し前に到着。担任を見つけると近づいて、ニコッと笑いながら担任を叩いてから、着席。「おはようございます」と皆といっしょにあいさつをすることができたが、担任が当日の製作課題についての説明を始めると同時に、A君は隣のB君に話しかけた。B君もうれしそうに喋りはじめたため、ふたりとも担任に注意され、喋るのをやめた。(B君もお喋りで衝動的なタイプ) A君は周りをキョロキョロみて、担任の話は聞いていなかった。数分後A君が、B君をくすぐり、B君もくすぐり返し、二人で叫び声を出して注意された。紙でクリスマスツリーを作る課題だったが、A君は自己流のやりかたで勝手にどんどん紙を貼り付けたため、「言われた順番どおり貼りなさい」と担任に注意された。暫く、ふてくされていた。A君は手に糊がついたのが気になり出し、保育室内の洗面台に行った。手を泡だらけにして遊び始めた。副担任に「泡で遊んではいけません」と注意されると、泡を床に撒き散らしながら走り出した。副担任がつかまえると「バカバカ、はなせ」と汚い言葉を発したので、副担任にきつく叱られた。何とか席にもどり、短時間製作に取り組んだが、すぐに飽きて回りを気にしだした。園庭の水溜りが眼に入り、気になりだした。そして、室を飛び出して水溜りでジャブジャブ遊び始めた。「戻りなさい」と室の窓から呼びかけても戻らないため、副担任と園長ふたりで連れ戻し、塗れた靴下とズボンを着替えさせたあと、別室で叱った。

<発達経過の概要>

1歳の時に歩き始めた。活発でよく動いた。2-3歳 デパートで迷子になったことがある。又、スーパーの駐車場で飛び出して交通事故にあった(軽い怪我)。

言葉は1歳0ヶ月「ママ」「バイバイ」と言い始めた。3歳には多語文で会話

保育園入園後、落ち着きがない

4歳(1ヶ月前)療育センター受診 知能テスト

IQ=105 テストではアンバランスは目立たない。「ADHD疑い」と言われた。

<現状をまとめる>

本人の特徴、環境、それぞれの場面での状況、保育者との関係…

<どのように工夫するか>

参加者(保育士)の発表

A君が問題を起こす前に止められなくて、起こしてから叱られるという、すべてについて後手に回っている感じがします。「いわれたとおりになさい」「いけません」「戻りなさい」という否定語が全部関わってきています。その原因としては、担任、副担任との連携がきちっとできていません。たぶんA君に関していえば、こういう状況は予想されているのに、こういう状況になったときには、こうするのだという連携ができていなかったのではないのでしょうか。たとえば、手に糊がついたのが気になって手を洗いに行ったが、糊がつくことは、予め、分かっているのに、手を拭くものを用意しておくとか、洗いにいっているときに、「気になって洗っているのだね」と声をかける程度にしておけば、A君は戻ってきたのではと思います。

あと、最初のところで、ニコッと笑いながら担任を叩いてからとあるが、多分、A君は担任に対しては信頼感を持っているのではないのでしょうか。担任に「順番どおり貼りなさい」と注意されても、ふてくされていましたが、しばらく、その場にいたということは、担任に対しては信頼感はあると思います。「そこをもう少し、担任の方も思いを受け止めるようなことをすればいいのではないのか」という意見もありました。A君の場合、周りのことをキョロキョロと見ることが多いので、「園庭が見えないような位置に座らせるとかいうことも考えた方がいいのかな」という意見もありました。

参加者(保育士)の追加意見

A君とB君がすぐに話したり、ふざけたりするということなので、A君の席を先生の近くにするとか、隣に助けてくれるような子を座らせるとかもできるのではないのでしょうか。それから、「この課題について、A君に合うように、副担任が補助しながらやれるといいな」という意見や、「違うことをしていても、副担任が少し付き合ってあげて、A君が満足できるものをつくってあげるといいな」という意見でもでした。

例2

B君 5歳の男児 (興味の偏り、マイペース)

<クラスの状況>

クラスは10数人で、担任は若い女性の先生がひとり。子どもの人数分の椅子と机があるが、場所は固定されていない。窓からは園庭が良く見える。ドアは廊下側と園庭側にある。

<園での様子>

朝、家を出る時に登園を少しいやがったが、母と一緒に登園。保育士の服に書かれていたアルファベットをみつけて「A」「C」などと読み始めた。「おはよう」と保育士にあいさつされたが無視したので、母に促され「おはよう」と言った（視線は合わせなかった）。

部屋に入り、着席。みんなで歌う場面では、B君は耳をふさぎながらウロウロし始め、奇声を上げた。園庭での自由遊びでは、一人で端の方に座り込んで虫を探していた。他の子は遊具であそんでいたのに、担任が一回遊具で遊ぶことを誘ったが虫探しを続けていた。時間になったので「部屋に戻るように」と言われたが、最後まで園庭に残っていたので、担任がそばまで来て強い口調で戻るように指示した。名残惜しそうではあったが、他の子が部屋に戻っているのを見て部屋には戻った。子どもたちは順番に手洗いをするために並んでいた。B君が先ほどとった虫を見せびらかしたので、子どもたちが集まってきた。担任が注意すると他の子どもたちは手洗いの列に戻ったが、B君は泣き出した。しばらく泣き続けていたが、担任が部屋のあった虫かごを貸し与えたら落ち着いた。製作課題は、折り紙を切って朝顔の形にする課題だった。担任が課題について詳しく説明していたが、B君は自分の折り紙をさわって遊んでいて、説明を全く聞いていなかった。他の子どもが折り紙を切り始めると、折り紙を自分のやり方で切ったが、うまくいかないためにすぐ飽きてしまい、部屋の端の置いてあった虫かごを見に行ってしまった。

<発達経過の概要>

1歳の時に歩き始めたが、言葉はやや遅めで始語1歳半、3歳過ぎに2語文が出た。2-3歳時には、ミニカーのタイヤや、扇風機など、回るものに興味を示した。また、呼ばれても振り向かないことが多く、視線も合いにくかった。また、かんしゃくを起こすことも多かった。3歳6ヶ月の時 療育センター受診 知能テスト IQ=85 視覚的な問題は良くできたが、言葉での説明がわからない場面が多かった。「広汎性発達障害」と診断された。最近は文字に関心が出てきた。

<現状をまとめる>

本人の特徴、環境、それぞれの場面での状況、保育者との関係…

<どのように工夫するか>

参加者（小学校教諭）の発表

挨拶を無視してA Cと服の文字を読んでいたというところでは、そこで、何とか反応してあげた方がよかったのではないかということや、視線は最終的には合わなかったようですが、正しい挨拶として一度目を合わせて「おはよう」といった方が良かったのではないかという意見がありました。歌のときに、耳をふさいでウロウロしてしまう場面では、障害の特性を踏まえて、この場面では若い女性の保育士さんが一人なのですが、できれば補助の先生がいるときは、外に連れ出してあげるとか、また、聞こえるときに起こるのであれば、耳栓をしてあげるという意見ができました。

園庭の一人遊びで虫探しをしていて、部屋に戻るようと言われたのですが、戻らなかったのも強くいわれたという場面では、自由遊びを始める時点で、「いついつまでだよ」と、この子には伝えてあげた方がいいのではないのでしょうか。視覚的な問題はよくできているという発達検査の結果もでていたので、「長い針が6までだよ」と示してあげたほうがよいのではという意見ができました。虫探しについては、自由遊びなのでそのままやらせてあげてもいいということです。その子が虫探しが好きのなら、遊具のほうに誘うより、他の子を虫探しに誘ってもいいのではないかと意見もできました。

虫探しが終わって、子どもたちが順番に手を洗うところでは、虫を見せてみんなが集まって来てしまい、先生が注意して、みんなを列に戻したところで、B君が泣き出しちゃったのですが、前もって、手洗いの指導をする前に、虫かごに入れて手洗いの指導をしたほうが良いと思います。みんなが集まって来ちゃったら、みんなに虫を見せて、「スゴイね」といってあげた方がB君は納得するのではないかと話し合いました。全体的に前もって、訴えることを考えて、子どもに見通しを持たせるように、「いついつまで」とかいうように先回りできたらいいのではないのかという意見が多かったです。

参加者（養護学校教諭）の追加意見

B君と担任の関係のところですが、虫が好きなら、一緒に虫を探してもいいのではないのでしょうか。折り紙の課題がこの子にとって難しいのであれば、もう少し簡単な課題にしてもいいのでは、あるいは、言葉での説明はなかなか難しそうなので、見えるような形で説明すると分かりやすいのではないのでしょうか。先ほど、前もって見通しをということでしたが、事前に、B君がやりやすいように工夫していくことも必要だと思います。

例3

Cちゃん 5歳の女兒 (すごく緊張する)

<クラスの状況>

1クラス24人で、担任は2人。1学年1クラスのごじんまりした幼稚園。机が2×3列に並び4人ずつ座っている。座る席は決まっていない。

<園での様子>

母の後ろにくっついて登園。緊張した表情。部屋に入るのを躊躇したが、母に促されて担任のそばの椅子に座った。朝の会では担任が順番に点呼。名前を呼ばれてチラッとみたが声は出さなかった。「大きな栗の木の下で」を歌う場面では、Cちゃん時々手を動かしたが、声は出さなかった。

製作時間：担任がハサミ、糊をロッカーから持ってくるように全体に指示を出した。Cちゃんは担任の前に立って固まっていたので、担任が連れて行った。同じ机の子どもは子ども同士喋りながら作り始めたが、Cちゃんは黙々と作り始め、途中までハサミで紙を切っていたが、ハサミがうまく使えないために突然止めてしまった。黙って椅子に座っていた。担任が来て作るように促したが、担任にだけ聞こえる小さな声で「いや」と言った。隣の子は作り続けていたが、Cちゃんは無表情で座っていた。

トイレに行く時間になったが、Cちゃんが動かなかったの、担任が手をつないでトイレまで連れて行った。しかし、園のトイレではできないので、トイレに行っただけで戻った。(いつも、自宅まで我慢している。)

昼食の時間になった。偏食がひどく、今日も白いご飯しか食べなかった。

<発達経過の概要>

乳児期はおとなしい赤ちゃんだった。9ヶ月頃から強い人見知りが出た。毎週会っている祖父母にも大泣きだった。1歳の時に歩き始めたが、言葉は遅めで始語1歳半、3歳過ぎに2語文が出た。家族とは多語文で会話ができるようになったが、家族以外とは話せなかった。3歳頃から数字やマークに興味をもつようになったが、他の子どもには関心がなく、独り遊びを好んだ。3歳6ヶ月の時 療育センター受診 知能テストの言葉のやり取り場面で黙り込んでしまったが、知的には正常と推測された。「広汎性発達障害」と診断された。

<現状をまとめる>

本人の特徴、環境、それぞれの場面での状況、保育者との関係…

<どのように工夫するか>

参加者（保育士）の発表

緊張した表情で保育園に来るお子さんで、歌や製作などに全く興味なく、勧めてみても一緒に入れない事例です。まず、担任との信頼関係が一番大切なと思います。信頼関係が全くできていないという状態で、安心して園生活のいろいろなことに関わっていけないということなので、2人の担任のどちらか、Cちゃんに合うほうの担任でいいと思いますので、Cちゃんのサポート役にするといいと思います。

机があって、座る席が決まっていないということも不安になる要因になっているようなので、席を決めてあげ、友達に興味を持てないということでしたので、担任が近くに座るように席を固定してはどうかと意見が出ました。担任との信頼関係がないので、歌や製作は無理と思うので、まず、名前を呼ばれたときに、チラッと先生の方をみただけですが、「そこにいたのね」という感じで認めてあげる、製作でも途中までやっていたので、そこもきちんと認めてあげることが大切かなと思います。「よくできたね」とか「ここからは一緒にやろうか」とか「ここまでできたからここからは先生がやろうか」というように認めてあげて関係を築いていくことが必要なのかなと思います。保育園生活に期待が持てるように、次の日に何があるのかということとCちゃんやお母さんに伝えてあげて、次の日に、期待が持てて、楽しんで保育園に来られるようになるといいのかなということを話し合いました。あと、マークに興味があるので、マークを使った遊びを考えてあげて、それでCちゃんが興味を持ったところで他の友達も一緒に遊ぶと友達にも興味を持てるようになるのかなと思いました。白いご飯しか食べなかったの、何が好きなのか、どういう風にか家でたべているのかを聞きながら子どもと一緒に取り組んでいけたらいいのかなと思いました。

参加者（保育士）の追加意見

担任との信頼はあるとの前提で検討しました。担任のそばに座るとか、担任と一緒にいけるとあるので担任との信頼はあるとしました。すごく緊張するのは、母が緊張しているのが子どもに伝わっているのもあるのかなと思います。母が、他の子どもにも声をかけるとか担任の先生とちょっと楽しそうに話している姿をみせてあげることで、多少、子どもの緊張が緩んでいくのではないかなという意見もありました。

全体を通して（驚見）

子どもの特徴や場面に応じた叱り方、ほめ方が大切です。子どもや保護者の方との信頼感も大切です。実際の場面では、上手くいくこともあるし、いかないこともあります。様子をじっくりとみて、工夫を積み重ねていきましょう。

今日は、参加者のみなさんから、数多くの良い意見が出て良かったと思います。

ありがとうございました。

平成21年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第2回 連続講座

講 師 浜松医科大学子どものこころの発達研究センター助教
医学博士 宮 地 泰 士 (小児科医)

「広汎性発達障害児の感情理解とコントロールスキルについて」

日 時 平成21年11月27日(金) PM3:30~5:00

会 場 西部地域療育センター1階 多目的ホール

対 象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

講師からのコメント

広汎性発達障害児では怒りや不安など負の感情を処理するのが苦手で、時にそれがパニックや他害行動の要因ともなることもあります。そのため彼らにとって自己感情の理解とそのコントロールスキルを高めていくことは大変重要な発達課題のひとつです。

今回広汎性発達障害児の感情理解とコントロールプログラム作成の経験などを通し、その支援のあり方についてお話ししたいと思います。

退任のごあいさつ

平成5年4月、名古屋市西部地域療育センターが開設されてから平成21年8月末日まで16年間、整形外科医師として療育に携わってまいりました。

たくさん子どもさんとその親御さんに出会い、たくさんの笑顔にふれ、本当に幸せな16年間だったと思います。

私に笑顔を振りまいてくれた子どもたちが18歳を過ぎても通えるクリニックを作るため、このたび退職を決意しました。子どもたちや、お母さんたちの不安を減らすために、私ができる事はなにか、それを追求し続けていきたいと思います。

長年にわたりご指導ご協力いただきました皆様に、心よりお礼申し上げます。今まで以上に患者さんやご家族にとって身近な存在となるよう、がんばります。これからもよろしくお願いいたします。

多和田 忍

(現:たわだリハビリクリニック院長)

ボランティア募集

保育場面での手助け(室内の活動、園外への散歩など)
教材づくり

保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事(運動会、夏祭りなど)のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター